

クロユリ

Fritillaria camtschatcensis

ユリ科

名前の由来

黒い花の姿に基づいて名付けられた。ユリは、茎が細く立ち上がりゆれるため「ユル」から、花が大きく「ユスル」ため、花が傾いて「ユルミ(緩)」から、など諸説あり。漢字名：黒百合

特定種

北海道レッドデータブック・・・希少種 (R)

形態的特徴

高さ20～50cmで直立する。葉は披針形で長さ3～10cm。茎の周りに3～5枚の葉が、数段に輪生する。花は黒褐色の釣鐘形で、茎の上部に数個がやや横向きにつく。花には少し悪臭がある。

類似種：特になし

生育環境・分布

低地～亜高山のやや湿った草原に生育する。

分布：国外分布は、千島・樺太・中国東北部・ウスリー・カムチャツカ・北アメリカ北部。

国内分布は、本州中部以北から北海道。

北海道内分布は、道北、道東、道央の低地～亜高山。道南の分布については不明。

十勝地方では、やや湿った草原や林内にまれに見られる。

生活史

開花時期：6～7月。開花までの年数：不明。寿命：多年草。

他生物との関わり

花には虫が訪れる。

興味深い話

■北海道の低地に分布する大型で3倍体(2n=36)の個体をクロユリとし、北海道と本州の亜高山帯に分布し小型で2倍体(2n=24)の個体をミヤマクロユリとして、変種として区別する考えもある。亜高山に分布する2倍体の個体のみが、受粉して実をつける。

■戦国時代に武将佐々成政が、侍女・早百合と小姓の仲を疑い手討ちにしたが、死ぬ前に早百合が、立山にクロユリの花が咲くとき、佐々家は必ず滅びると、恨みをクロユリに託したという話がある。

■アイヌ民族の言い伝えでは、「黒百合に思いを込めて、人に知られぬように好きな人の傍らにそっと置き、その人が何気なく手に取れば、二人は必ず結ばれる」という。

■十勝地方のアイヌ語では「パウチコロン」という。別名で「アンラコロ(黒い葉をもつ)」とも呼ばれる。鱗茎をゆで、油をつけて食べるという。

■かつて帯広川筋にはアンラコロタウシナイ(クロユリをいつも掘る川)という地名があった。帯広市の花でもある。

配慮事項

生育している環境全体が重要である。

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期												
結実期												

参考文献

「改訂版 牧野新日本植物図鑑」牧野富太郎 北隆館 1989

「北海道植物図譜」滝田謙讓 自費出版 2001

「日本の野生植物 草本I」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社 1982

「日本野生植物館」奥田重俊 小学館 1997

「アイヌ植物誌」福岡イト子 草風館 1995

「北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック2001」北海道 2001

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館(編)、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004



クロユリ(右上も)

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(鳥辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類
ワシ・タカ